

◆天璽と神璽

神璽が天皇の御璽であるのは周知の事実だが、神璽そのものについては、未だ定まった見解はない。名だたる国語辞典でさえ、神璽あまつしるしⅡ天璽あまつしるし（天津瑞）Ⅲ三種の神器と見てきたほどだ。確かに『古事記』に、「八尺の勾玉、鏡、草薙劍、また常世思金神、手力男神、天石門別神を副え賜いて、・・・この二柱の神（鏡、草薙劍）は、さくくしろ、五十鈴の宮に拝き祭る」とある。

『日本書紀』も、「火瓊瓊杵尊に、八坂瓊の勾玉及び八咫鏡・草薙劍、三種の宝物を賜う」と記し、さらに『古語拾遺』は、「八咫鏡及草薙劍の二種の神宝を以て、皇孫に授け賜いて、ひたぶるに天璽（いわゆる神璽の鏡・劍是なり）」としたまう」と伝える。だからと言って、

三種宝物の八咫鏡Ⅱ天璽Ⅱ神璽と決めつけてしまうのは、短慮でしかも錯誤でしかない。

そもそも、このような誤りに陥った原因は、『古事記』の「（鏡、草薙劍は、）さくくしろ、五十鈴の宮に拝き祭る」、『古語拾遺』の「ひたぶるに天璽（いわゆる神璽の鏡・劍是なり）」としたまう」の真偽をしつかり確かめずに鵜呑みにしてきたところにある。

①天璽の鏡・劍と神璽の鏡・劍

このことを肝に銘じて、天璽とは何か、神璽とは何か、天璽と神璽の関係、二人の天照大（御）神と天璽の関係、天照大御神と天璽の鏡・祭祀の変遷について、どこまでも迫って行きたい。

【天璽の鏡】

天照大御神が高千穂宮に天宮して日神（天之日天神）に昇った御璽として、大乱後の一八〇年代後半に天石窟戸前で鑄造された。又の名を八咫鏡、日の像の鏡、真経津鏡という。

『日本書紀』、「日神、・・・天石窟に居しまして、その窟戸を閉しぬ。時に、諸の神たち、憂えて、乃ち鏡作部の遠祖天糠戸者をして、鏡を造らしむ。・・・」

『古語拾遺』、「思兼神の議はかりごとに從したがいて石凝姥神いしこりどめをして日の像みかたの鏡いを鑄いしむ。初度はじめに鑄いたるは、少意いずみかみに合あわず。かな〔是、紀伊国の日前神ひのくまなり。〕次度つぎに鑄いたるは、その形美麗うらわし。〔是、伊勢大神いせのおおみことなり。〕」

ちなみに高天の原に座した日神は、新羅に出兵する素戔嗚に熊野家再興を託した上で、日矛など日隈神宝や八咫鏡を手渡した。その後、素戔嗚は出雲に潜入して豊葦原中つ国の立て直しに奔走したものの、大己貴に妨害され、これら祭器を奪われてしまった。

その大己貴は高天の原から繰り出してきた遠征軍に国譲りし、日神に祭器全てを返上した。ここに、真経津鏡・試しに鑄込まれた鏡が高千穂宮で揃って祀られることになった。

ついで日神は、吾田に降臨する天孫火瓊瓊杵に日隈再興を託し、八坂瓊の勾玉及び八咫鏡・草薙劍の三種宝物、さらに日矛も授けた。

この八咫鏡も、天石窟戸前で鑄造された鏡であり、日の像の鏡と呼ばれた。

七十数年後の神武（磐余彦）東征のみぎり、この八咫鏡は紀伊国の日前神宮に奉納された。又の名を日前鏡といった。

ここで、よくよく考えよう。古代から今日に至るまで、時の天皇が御璽とした神璽の鏡・剣を片時も手放さなかった歴史に思いを馳せると、天神であった日神が自身の地位を印す天璽を天孫に与えるなど、あり得ないのだ。これは、天璽の変遷を辿ることで、容易に確認できよう。

今一つ、火瓊瓊杵が授かった三種宝物の八咫鏡は、磐余彦の手に渡って紀伊の日前神宮ひのくまに奉納され、日前鏡と呼ばれた。『古語拾遺』も、「初度に鑄た鏡は紀伊国の日前神ひのくまなり」と伝える。

【日前神宮・国懸神宮】（和歌山市）、秋月の地には、日前神宮と国懸神宮が隣接して鎮座す

る。二つ合わせて、日前宮とも名草宮とも呼ばれる。日前神宮は日前大神を祭って日の像の鏡（日前鏡）を御神体に、国懸神宮は国懸大神を祭って、日矛鏡を御神体にすると伝わる。

【日前神宮の古記録】、「神武軍が難波に到った際、天道根は日矛・日前鏡のの神宝を奉って紀伊秋月に馳せ参じ、日前・国懸の神として祀った」

これから察するに、日神は天孫火瓊瓊杵に対して、初度に鑄た出来の悪い鏡を天璽の鏡のごとく授けたことになる。別な言い方をすると、三種の宝物、神宝、ひたぶるに天璽という表現こそ、天璽や神璽でないと言うに等しい。当然、三種宝物の八咫鏡Ⅱ天璽の鏡Ⅱ神璽の鏡と見なすのは、大間違いということになる。

【天璽の劍】

皇太神は三輪オロチと組んで天叢雲とも天照大神とも語ると、厳之国王朝（邪馬台国）を再現して水天神に昇り、その印として天叢雲劍を天璽と定めた。この劍は大乱後の一八〇年代に纏向で、かつての厳之国王朝、豊葦原中つ国王朝、伊都国王朝の開祖らが御璽とした八握劍や天叢雲劍に似せて鑄造されたらしい。日本武は陸奥に赴く途中で、これを草薙劍と改めた。

【神璽の鏡】

神武天皇の神璽として、天照大御神の天璽を型にとって倭の笠縫邑で鑄造された。後に、宮中の賢所（内侍所）で祀られてきた。いうところの三種宝物の一つ、八咫鏡ではない。

【神璽の劍】

神武天皇の神璽として、天璽の劍を型にとつて倭の笠縫邑で鑄造され、賢所で祀られてきた。

『古語拾遺』「崇神天皇」、「斎部氏をして石凝姥神が裔・天目一箇神が裔の二氏を率て、更に

鏡を鑄、劍を造らしめて、護の御璽とす。これ今 踐 祚す日に、獻る神璽の鏡・劍なり」

④天璽の鏡・剣以外に、瑞宝十種と天鹿兎弓・天羽羽矢が天璽として伝わっている。

『日本書紀』、「高皇産靈尊、(天津彦国照彦火瓊瓊杵を)降し奉る。時に、天忍日尊、・・手には天楯弓・天羽羽矢を捉り・・天孫の前に立ちて遊行き降来りて、」

『先代旧事本紀』、「時に正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、奏して曰さく、『僕將に降らむと欲い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』とまうす。詔して之を許したまふ。

天神の御祖、詔して、天璽の瑞宝十種を授く、

「冬十一月に、可美真手命は正殿の中に天璽の瑞宝を奉った。帝と妃の御魂を崇め鎮めて、長寿を祈った。御鎮魂祭は、これより始まり」

「神武紀」、「天皇の曰わく、『天神の子亦多にあり。汝が君とする所、是実に天神の子ならば、必ず表物有らむ。相示せよ』とのたまう。長スネ彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩靴ちちゆぎを取りて、天皇に示せ奉る」

「神武記」、「ここに邇藝速日命参赴きて、天つ神の御子に白ししく、『天つ神の御子天降りましつと聞けり。故、追いて参降り来つ。』ともおして、すなわち天津瑞あまつしろを献りて仕え奉りき」

◇結局、大乱後に四人の天神、即ち日神の天照大御神、水天神の天照大神、火天神の天鹿兎山、日天神と火天神を兼ねる天照国照彦火明饒速日が立ち、それぞれが天璽を奉ったことになる。

真経津の八咫鏡 ……高天の原に坐す日神の天璽。皇祖皇宗・日神の天照大御神の天璽

天叢雲劍 ……水天神・天照大神(天照大御神の入り婿、邪馬台国の開祖)の天璽

又の名の草薙劍 ……皇祖皇宗・日の神である高皇産靈の天璽

天鹿兎弓・天羽羽矢 ……火天神・天鹿兎山(天羽羽、天照大神の嫡子)の天璽

瑞宝十種 ……火明饒速日が古の蔽之国王朝宗家・宗像家を継承した印しの天璽

天羽羽及び歩韮……火明饒速日が火天神の御子に入籍した印しの天津端。

……火瓊瓊杵は火天神の御子に入籍した印しとして、天柁弓・天羽羽矢を所持しながら天降った。この表物は、火火出見から磐余彦に渡った。

⑤結局、天照大神の天璽だった天叢雲劍、試しに鑄込まれた鏡（日前鏡）は、こう渡り歩いた。

